床をとれ　（岡山県）

むかし、ある村に、そまつな宿屋がありました。あるとき、お殿さまが泊まることになりました。

夜になると、お殿さまがお休みになるというので、家来が、宿の亭主に、

「床をとれ」といいました。

亭主は、この前、座敷に床をすえつけたばかりだったので、こまってしまいました。けれども、もし無礼があって打ち首にでもされたらたいへんです。そこで、亭主は、お殿さまのお休みになる座敷の床を、ひっぺがしはじめました。家来がびっくりして、

「何をするんだ」というと、亭主はいいました。

「床をとっております」

「その床じゃあない。寝間にふとんを敷けということだ」

亭主は、

「へいへい」といって、ふとんを敷きました。

しばらくすると、家来が、

「お殿さまは、朝が早いから、あした朝早くきれいな手水を回すんだぞ」といって、寝ました。

亭主は、

（手水を回せとおっしゃったが、手水って、便所のことだよなあ。なかなかうちの手水は回らんよ。困ったなあ。そうだ、お寺の和尚さんは何でも知っているから、教えてもらおう）と思って、お寺に行きました。

「和尚さん、和尚さん。お殿さまが、朝早く手水を回せとおっしゃるんだが、なかなかうちの便所は回りません」

和尚さんは、しばらく考えて、

「ちょうずというのは、便所じゃなくて、長い頭のことじゃ。長い頭と書いて、ちょうずと読む」と教えてくれました。亭主は、長い頭をしていたので、よろこんで帰って行きました。

つぎの朝早く、亭主は、お殿さまの前に出て、頭を、くりくり、くりくり、一生懸命回

しました。家来がびっくりして、
「何をしているんだ」というと、亭主はいいました。
「手水を回しております」
「その手水じゃあない。顔を洗う水をくんで来いということだ」
亭主は、
「へいへい」といって、おけにきれいな水をくんできました。
お殿さまが帰ったあと、亭主は、
「やれやれ。あんな言葉の分からんお客さんを泊めちゃあならん」といいましたとさ。
おしまい

村上郁再話

資料『中国山地の昔話』稲田浩二・立石憲利編／三省堂